

セミは身近な昆虫、毎年夏になればあちこちにいた。オレがいまだに残念なこと、知らないことで屈辱的なこと、それはセミの名前、種類を知らないことだ。「あれは 00 セミ 夏の今頃 鳴く 先ほどのやつは 00 セミ・・・」そういうことを、だれかれからよく聞きたびに、「オレは 知らない・・・」と、トホホ状態になる。

セミはカメムシ目だったとは知らなかった。蛹にならない不完全変態、幼虫から羽化していきなり成虫になる。成虫は空を飛び回って1週間〜ぐらいの命だが、樹などに産卵された卵は翌年孵化して地中に潜る。地中では脱皮を繰り返して大きくなる。地中 20〜70CM あたりをうろうろして植物の根から汁を吸う。成虫も樹に止まって管を差し込み樹液を吸う。幼虫はモグラが怖いね。<変態：卵→幼虫→蛹→成虫>

ファーブル昆虫記：私たちは子どもの頃、よく暗唱させられたものだ。覚えやすい詩句で、セミが謡われているが、そのセミは、北風が吹いてくると、どうすることもできず、お隣のアリに、食べ物をめぐんでくれと泣きつく。ねだりに行ったセミは、すげなくあしらわれる。

<歌っていたんですって！ けっこうですね。じゃあ今度は踊ったらいかが。>

この話を聞いて、「あれれ オレが聞いたものとは違う あしらわれたのは、キリギリスのような記憶が・・・」。詳細がわかった。イソップ寓話のひとつ。元来の主人公は、セミとアリだったが、ヨーロッパ北部ではセミはなじみが薄かったので、キリギリスの登場となった。アリは夏の間も冬の食料を蓄えるためにせっせと働き続ける。キリギリスは夏の間、バイオリンを弾き歌って過ごす、冬になると食べ物が見当たらず、アリに食料を乞いに行く。アリはそれを拒否し、キリギリスは飢え死にをしてしまう。

オレも子ども時代にイソップ寓話のこの話を何度も聞かされ、「まじめに努力しなくては・・・」なんて神妙に思ったものだったが、オレの人生のほとんどが、歌って踊ってキリギリスを演じていたのだと、いまさらあきれる。

ファーブル昆虫記：この寓話はギリシャからフランスに伝わったものだ。ギリシャはオリーブとセミの国だ。ギリシャ人はセミのことをよく知っているはずだ。冬にセミがいるなどというバカ者はひとりもない。畑を耕すものは誰でも、セミの最初の姿を知っている。それはセミの幼虫で、冬が近づき、オリーブの根元に土をかぶせてやる時に掘り出される。夏になるとその幼虫が、丸い穴から抜け出してくるのを知っている。小枝につかまり、背中が割れて、抜け殻を脱ぎ捨て、たちまち茶色から緑色のセミに生まれ変わる。

ギリシャの寓話作家はけしからぬことをした。彼は自分のそばでシンバルを鳴り響かせている本物のセミを調べもしないで、セミの話を書いた。

ファーブル先生は、寓話を攻撃し、セミを擁護し、アリを攻撃している。セミがいかに素晴らしい存在か、寓話と反対で、アリがいかに…ちょっと紹介。

ファーブル昆虫記：真実から見ると、寓話作家のいうことは道理にあわないつくりごとで、問題にならない。セミとアリのつきあいは寓話とはあべこべだ。つきあいを頼むのはアリと方で、セミは生きていくうえで他のものの助けなんか少しもいらない。のこのこやってくるのはアリの方だ。アリは歌手に哀れっぽく頼むどころかセミから搾り取り、ずうずうしく盗み取る。セミは口にある管で汲んでもつきない酒蔵に穴をあけ、歌い続けながら樹液を旨そうにのどを潤すのだ。まわりに虫が寄ってくる、おこぼれにあずかろうと、ハチ、ハエ、アリなどがいそいそやってくる。強盗のようにいちばんひつこく樹液を舐めるのがアリだ。セミはおしっこをひっかけ去っていく。歌手であるセミはしばらくすると命がつき地面に落ちる。その中身がいっぱい詰まった亡骸を見つけたアリは、獲物をずたずたに切り裂き、ばらばらにし、食料の貯えにするのだ。羽を震わせ瀕死のセミに襲いかかる屠殺者のアリの姿もめずらしくない。

読み始めてすぐに“スカラベ”という昆虫の話です。まずは聞いたことのない単語、“フンコロガシ”のことでした。甲虫この単語は知っていましたが、“こうちゅう”という発音だったかと知った。

甲虫の仲間はたくさんいるらしい。カブトムシやクワガタムシ、カミキリムシやカナブンもそうだろうと思っていたが、テントウムシやホタル、水中のゲンゴロウやミズスマシも甲虫だというから驚いた。〈ネット情報〉

コガネムシとカナブンは別物、これも驚いた。我が家の葡萄の葉を全滅させるやつが、丸こく緑色のコガネムシだ。カナブンは緑色もあるが、角ばっている。とはいえ、明日には忘れてるね。

南フランスにいる昆虫と、日本にいるものとは、共通の種類は少ないのかな。セミやアリ、キリギリス、チョウにトンボ、これらはよくよく知っている、馴染んでいる虫たちだけれど、スカラベは知らなかった。

これも、ネット情報だけれど、日本にもフンコロガシがいるらしい。“マメグルマコガネ”という名前で、体長は2mm、ゴマ粒のようなものだ。「発見した 見つけたぞ」とさかんに叫んでおられるが、学者なのか、スキモノの方々なのか知らない。体長は2mm、ゴマ粒のようなものだとすると、老眼鏡やらルーペが要るね。

またまた、ネット情報だけれど、「日本には150種のフン虫がいる 50種が 奈良公園に」奈良公園には1000頭の鹿がいる、彼らの糞が1日で1トンだそうだ。そのほとんどをフン虫が処理する。奈良のフン虫は、5mm～30mmのコガネムシだそうだ。

スカベラは、いちど玉（糞）をかかえて巣穴に閉じこもってしまうと、昼も夜も、とことん食べて食べて食べつづけます。そうしてその口の反対側、つまりお尻からは、油を塗った黒い糸のようなものが、くるくる巻かれて出てきます。ファーブル先生は時計を片手に、朝から晩まで食料にかじりついている一匹のスカラベを調べました。12時間も休みなく喰い続け、同時に糞をし続ける生き物がほかにいるのでしょうか。このあたりを日本で初めてファーブル昆虫記の大杉栄訳では・・・。〈一昼夜もかかってその団子をむさぼり喰って、喰らう尻から尻へそれを糞にして出してゆく。その徹底的糞虫さ加減！〉

フン虫がたくさんいる牧場に行ってみると、牛や馬のフンは、昨日今日の新しいものしか落ちていません。それより古いものは、とっくにフン虫が始末してしまったのです。もし、いつまでもフンの下敷きになったままだと、草は枯れてしまいます。都会は地面が舗装され、フン虫の住みにくい環境であるため、イヌのフンがいつまでもその場所に残っているのです。

その自然のバランスを崩したのが、オーストラリアの場合です。オーストラリアにはカンガルーの仲間が大昔から非常にたくさん住んでいました。そのフンを食べる虫もたくさん住んでいました。ところがヨーロッパから移住してきた人間が、牛や羊を広い平野で飼うようになりまし。オーストラリア全土で牛が落とすフンは相当量になりますが、オーストラリアのフン虫は牛のフンを食べようとしない。フン虫にも好みがあって、種類によって食べるフンが決まっているようです。毎日大量のフンが牧草地を覆っていきます。牧草が枯れ、雑草が増え、大量のハエが発生し、伝染病が広がります。

オーストラリアの人たちは、外国からフン虫を持ち込んでフンの始末をさせることにしました。これが大成功したのです。アフリカや東南アジアのフン虫が連れてこられたのです。

アフリカの大型草食獣の大量のフンも、たくさんの種類のフン虫が活躍しています。フンの始末をするだけでなく、土を掘り返すので、クワで耕すように、大地が耕かされ、新しい生命が生まれます。

小松貴著<昆虫学者はやめられない-裏山の奇人、徘徊の記>

衣川さんとのメールのやり取り：

オレ：「最近の若い学者の本 鳥も昆虫も ちょとふざけた表現が多い」この本も“題”という点ではその典型だ。“川上和人”さんの本も読んでいてふっといやになるくだりがある。「オレが オジン なのかな」

衣川さん：ぼくもねえ、最近の若い動物学者の本の言葉遣いが軽薄だなあと思っていた。例えば「カラスの教科書：松原始著」もそうだったし、最近読んだ「バッタを倒しにアフリカへ：前野浩太郎著」もそう。内容は面白いが、言葉遣いが軽薄すぎて若者受け狙いのよう。多分若い著者の気分と出版社の編集者の意向がそうさせているのだと思う。

ファール昆虫記を借りたついでに、同じコーナーに在った昆虫のこの本、「あたりだ」とはそれこそ表現が軽薄すぎるかな。36歳下の成年、我が娘と同じ年である。こいつはすごいと思わせるところは、腕白少年が、昆虫少年がそのまま大人になったようなところがあり、蛇やカエルとの付き合い方を語ってくれる、昆虫以外の鳥や動物でも、半分は言葉が通じるんだという雰囲気や文章の端ばしに感じられる。

NHKの自転車番組で、火野正平がチョウやトンボをなんなく捕まえる、蛇やトカゲもなんなく捕まえる、これには感心している。我々のガキの時代には、右や左のガキ共が、蛇やカエルを素手でつかんだり、虫の足を引っっこ抜いたり、そんなことは普通のことだった。オレも大きな蛙をつかまえ、足の指先を歯でちぎり、皮をむ黄、足で身体を踏んづけて足だけを引き抜き釣り針に刺していた。オレはガキが終わったところからそんなことは、できなくなった。学者も素人も、「メロメロに 生き物が 好き」という性格はいいね。

小松貴先生：娘と同じ年なので、“たかし君”と呼びたいところだが・・・ほほほ。彼はアリの巣にいる“アリズカコオロギ”を専門に調べている。こんな虫は初めて知ったので紹介。それと虫の写真撮影の話。“合成深度”というらしいが、カメラマンにきくと昔からある技法らしい。

アリズカコオロギ：コオロギぐらゐは知っているが・・・。秋になると鳴く虫、羽をこすりあわせてコロコロ聴こえる、家の中にもいる、ぴよんぴよん飛ぶ。アリズカコオロギはコオロギの仲間だけれど 米粒ぐらゐの大きさで、すごく敏捷だそう。アリの巣をめぐってみると居るそうだけれど、見たことはない。小松先生は子ども時代から、アリの巣の中に、「けったいなやつが居る」と知っていたそう。その生き方がすごい。アリは凶暴で攻撃性が強い、そんなアリの群れの中で、食べ物をおねだり、彼らと一緒に寝ている、そんな不思議なコオロギだそう。アリヅカコウロイギや托卵するカッコー、教えられることもなく自然にそのスタイルに嵌まっていく、自身の生き方を決めていく、そんな生き方のコントロールがいかに不思議。アリにとってアリズカコオロギは何か益をもたらしてくれるどころか、住居侵入、食料窃盗という被害以外の何物でもないそう。それでもアリの巣の中には、アリズカコオロギがよくいるそう。

合成深度：写真撮影の折、ボケが美しいとか、手前も後方もピントがあっているなんてよく聞く言葉だが、もうひとつよくわからなかった。先日も中西さん（カメラマン）から、「岡村さん 10ミリの超広角 買い 10ミリだけで 写して み」なんだかわからずに、10~24ミリを買った。「このレンズは パンフォーカスが・・・」「手前も後方もピントがあっている」ということらしい。写真は手前、中間地点、後方とおおざっぱに分けると、どこかにピントがあい、どこかがぼける。そのてん、目は全部にピントあう、という不思議。話は脱線したが、たった3ミリの虫の写真を撮るのにカメラをちょっとずつ離してなんと30枚も撮る、その30枚を合成してどこもかしこもピントを合わせるという技術らしい。

小松貴著<昆虫学者はやめられない-裏山の奇人、徘徊の記>

カエルの話：繁殖期のトノサマガエルのオス達は、それぞれの田んぼの一定範囲内（だいたい半径1メートルくらいだろうか）に縄張りを構え、そこを死守する。他の個体がそれを犯すと、オスはそれを何者か確かめるべく接近する。侵入者がメスであれば、オスはそのまま背中に取り付いてめでたくカップルの成立となり、他の個体に干渉されない産卵場所に移動する運びとなる。しかし、ライバルのオスが侵入者だった場合、その場でオス同士の激しい戦いが始まる。トノサマガエルの戦いは取っ組み合いの相撲だ。相手の正面からとびかかり、上から押さえつけて相手の顔を水中に沈めたほうが勝ち。エラで呼吸するオタマジャクシの時と違い、カエルの大多数種は肺（そして皮膚）で空気中の酸素を吸って呼吸する。脊椎動物を骨格標本にしたとき、骨の通った尾が無いのは類人猿、鳥類、カエルだけだ。「おおお 類人猿には尾がない はじめて知った」

先生：トノサマガエルを間近でじっくり見たい、近寄せてやろうと悪巧みを思いついた。カエルの目は、物体の動きには敏感だが、物体の形状を識別する能力は低い。私は樹の枝を持ってきて、落ち葉の塊をひっかけ、水面をパシャリ叩いた。カエルは音の方を見ただけだ。カエルもそんなに馬鹿ではない、ライトで照らしていたのがよくないのか、薄暗くして叩いてみるとカエルは暗い中で何か良からぬものが蠢き、縄張りを侵犯してきた寄ってきた。私は目の前で、トノサマガエルが鳴く様子を堪能できたのだ。

オレ：昨日近所の柳谷観音に行った。目の神様だとかで、聖水を汲みに行った。山寺なのでいくつか石段を登り、坂道を登り、いくつかの堂をめぐる。上の方に和風庭園の小さな池がある。水に濡れ苔むした石の間から、10センチ足らずのカエルが池の中に飛び込んだ。足の筋肉をいっぱいを使い、50センチほど飛んで、ぽしゃッと水に潜った。さすがカエル、飛び込みも泳ぎも上手い、大きなしぶきもあげずに水に突っ込み、そのまま水中をひとかきふたかきスイスイである。「古池や カワズ飛び込む 水の音」誰だったか、一茶だったかと調べたら、芭蕉の代表作らしい。俳句に関しては無知文盲のオレ、カエルが春の季語だとは初めて知った。ぽしゃりカエルが池に飛び込む、水中をス～スイスイ進む、これだけで絵になるねえとオレも詩人になった。

考えてみれば、我々人間も、イヌやネコも、鳥も昆虫も、生物だ、生きているのだ。喰わなきゃ、子孫を残さなきゃ、ちょっとでも長く生きなくっちゃ。オレも昆虫も、旨いものが喰いたい、腹がへってはたいへんだ、時間が経てば腹がへってくる、腹がへっても食うものが無いとパニック。オレも昆虫も子孫を残さなくっちゃ、「昆虫は 好き嫌い グルメなんて あるのかな」「ジジイのオレに 生殖能力はない」長生きに関しては事故でもない限りオレはあと10年～ぐらいの命かな。昆虫は、セミは、地上に出てたった一週間ちょっとで命がつきる。これは可哀そうだというけれど、セミは地中で2年～7年と長生きする。地中なんかで生きたって、つまらんじゃないというが、これはこれで面白い。地中、土の中には素晴らしい世界がある。光や輝きはないが、仲間がたくさんいて情報交換に思考交換、詩が生まれ歌が響く。地中快適空間はいつもながらに暖かくしっとりとした風が吹く。どこでも罅になる、前に進めば食いものにあたる、排便すればだれかが喜ぶ、治安はいい、捕食者が少ない、いいことづくめの地中生活、ちょっとでも長くいたい、のんびり過ごしたい。とセミやら他のイモムシたちも言っています。

またもや考えてみれば、オレも人間、オレも生物、喰って、排せつして、食べ物を取り合って、自分のために戦って、自分に優しく、自分以外の人間や生物には厳しく接する、上から目線で、勝利を願い、搾取をする。

そのてん絵はいい、絵は語らないし、想わないし、欲もない。アート全部がそうかもしれないけれど、嫌な人間が生み出したアート作品だけど、それらをどこかに持っていき、地球のどこかにそっと置く。地球のどこかでひとり歩きしてもらおう、創った者の解説も能書きもいらない、だれも紹介する人もいらない、ただ在るだけでいい、それらのアート作品は、そっと、どこかに在るだけでいい。

小松貴著<昆虫学者はやめられない-裏山の奇人、徘徊の記>

自分と同じ干支の動物とは、相性がすこぶる悪い。こういう家族の中で育った先生は犬が一番嫌いだそうだ。オレは戌年生まれ、我が娘も彼も同じ年の戌年生まれ。干支のことでは、毎年晩秋になると、戌やら、兎やらの画像が飛び交い、「年賀状の図柄 どうするの」とよく聞かれる。干支とはこの程度のつきあいだけだ。

ところで、オレは犬が好きだねえ。ゴールデンレトリバーの“小紅”が失踪してからもう長い、それ以来我が家には犬はいない。もっぱら散歩に連れられ歩いている犬たちを見つめるだけで我慢している。世界の犬種の中で、DNA 鑑定の結果、柴犬がオオカミに一番近いらしい。柴犬は主人と歩いていてもこちらを見ない、まっすぐ前を向いて、他人を見ようとしめない。柴犬とはすれ違っただけでは仲良くなれない。

オレが犬を見つめていると、大きな目玉でじっと見返してくるのは、レトリバー、シェパードなどの西洋の犬種が多い。ニヤリとしながら見つめていると、主人と共に歩きながらも視線はこちらに、「お前も犬か 犬語で話そうか」なんてことは言わないが、名残惜しそうに歩き去っていく。アイコンタクトができたかな、とほくそ笑んでいるが、こういう話を動物飼育係りの方々に聞いてみたい。

メクラチビゴミムシ：なんとすごい名前だと思うが画像のその虫は、褐色のスマート、敏捷そうな素晴らしい姿に映っている。日本には 400 種ぐらい、おもに暗い洞窟に住んでいる米粒大の虫のようです。「名前がひどい」ということ、各洞窟によって種が違うということでも有名のようだが、オレは知らなかった。

先生：この虫探し：地形図を頼りに、まず山間部の谷筋をわき目もふらずに登り詰める。そして山沢の源流部ギリギリまで行き、水が無くなる場所まで辿り着いたら、そこを掘る。ためらいもせず、50 センチくらいを一機に掘ると、やがて地下水面にぶつかる。そしたら今度はその地下水面を追うように水平方向に掘っていく。すると土砂を除ける過程で運がよければメクラチビゴミムシをはじめ種々の地下性生物が出てくるのだ。<略>2 時間ぐらい一気に掘らないと、虫がどんどん隠れてしまう。土木作業の後には全身泥だらけ且つ激しい筋肉痛に見舞われるが、たった一匹でも地価の隙間から深紅の甲虫が出てきたら、もう嬉しさもひとしおだ。

先生：洞窟で探すのもまた違った面白さがある。真っ暗い中をヘッドライトひとつで突き進み、地面に落ちている石を一つ一つ調べていく。狭く湿度の高い洞内で、ずっと腰をかがめ下ばかり見ているのはなかなかきつい。しかし、十数個に一個ぐらいの割合で、石の裏側に小動物が取り付いているのを見つけられる。真っ白いワラジムシやクモ類が筆頭だ。石を動かした瞬間そこから走りだす赤い生物といったら、メクラチビゴミムシくらいしかいない。真っ白い鍾乳石の上にたたずむ赤い甲虫の姿は、まるで白磁の上に垂らした一滴の血だ。コーモリの棲む洞窟の地面には、大量のグアノ（排泄物の堆積）があり、小さな生物にとって貴重な栄養源になっている。

山の中、川の源流、谷の突きあたり、そんなところで穴を掘っている人なぞ見たことがない。「虫を見つけたら天にも昇る思い」なんてセリフがいい。山に登るオレはその風景がよく見える。麓ではたっぷりゆっくり流れる小川、少し登ると斜度がきつくなり水が岩の間を白い筋を付けて駆け降りる。もう少し上に行くと水が少なくなり、土の上、石の上を伝うように水が流れる。ここが最初かなと思える場所、ポとりポとりと水が滴る。そんなところでスコップを振り、泥まみれびしょ濡れになりながら穴を掘るアンちゃん、これはすごいね。

近所の安威川の中に、胸まであるゴム服を着て、網で水を掬っている人たちを時々見かけることがある。目的は魚貝類なのか植物なのかわからないが、ひとりであったり、数人であったり、掬っている。

オレンチ、2 年前に清子さんからメダカをもらい、バケツぐらいの大きさの壺に入れて飼っている。先日 100 円で浮草を見つけ壺の中に入れると、嬉しそうに草の近くまで浮き上がり、スイスイ泳いでいる。「卵があるかも」浮草の根元を見ると、1 ミリぐらいの透明な球がいくつか。「それを 別の器に入れると 孵るかも」「同じ器なら 親が食べるかも」しばらくして小さい器を見ると、ヒョイシューなんと 2 ミリぐらいの魚が泳いでいる。近くのものが見えにくい年だが、1 ミリ 2 ミリが素早く動くと、なにがなにやらの嬉しさだ。

小松貴著<昆虫学者はやめられない-裏山の奇人、徘徊の記>

虫を採って集めることを趣味としている人のことを、「虫マニア」「虫や」と呼ぶ。虫に嵌まりだした最初はカブト（5種）・クワガタ（50種）・チョウ（400種）などを採集する。次に例えば、カメムシ・ガ（4000種）などに興味移っていく。カメムシは今でも新種がたくさん見つかる。ガもその美しさと愛らしさに人気が出ている。

ガの魅力は多様性のすさまじさ、毎年新種が出てきている。チョウは日中駆けずり回れば採れる。ガは夜行性なので暗い野山は危ない。白い布に煌々と灯りを点し、虫が白い布に止まったところを回収するのが普通のやり方だった。しかし、灯りに寄ってこないガがいるのだ。

キリガ：3~4センチのガ、日本に100種ぐらいいる。3月上旬の夕方に、安物の焼酎とカルピスをもってなじみの裏山に向かう。手ごろな大木を見つけ、幹に勢いよく焼酎をぶっかけ、適量のカルピスをかけていったん帰る。夜8時過ぎに大木の前に立った私の目の前には、にわかに信じられないような光景が広がっているのだ。凍てつく寒さのなか、焼酎とカルピスをぶっかけられた樹幹を覆いつくすかのように、ガが群がっているのだ。厳冬期の森の酒場に飛来したキリガたちは、物静かに口吻を伸ばし酒をすする様は渋い模様の翅とあいまって、カウンターバーに寄り掛かる紳士を思わせる。私も彼らに礼を失することなきよう、カップを開け彼らと一緒にちびちび飲む。<キリガ画像は普通に茶褐色のガ、されどよく見ると様々な模様が、渋く美しい、すごい。>

ホソミオツネトンボ：擬態して身を守る昆虫、葉、枝、幹に擬態する。冬になると信州の裏山、畑に桑の木が生えていた。冬になると、枝のどこかに尺取虫がつくのだが、そいつの枝への似せっぷりは、とにかく神がかった。しかし何回も探し続けていると、この辺にいとわかってくる。自然観察会などで、瞬時に尺取虫を数匹見つけると、10人が10人目をむいて驚く。実に気分がいいと、ドヤ顔。

即時発見が難しいのが、ホソミオツネトンボだ。日本でイトトンボの仲間の3種のみ、成虫の姿で越冬する。冬に水場近くの枝にしがみつきのまま一冬動かない。むき身で越冬する虫は、敵襲、風雨、急激な気候変化が大敵だ。よく行く裏山で、日陰で寒い場所を探した。暗く冷たく、生物の気配が一切ないスギ林を、身をかがめ右往左往し始めて1時間ぐらい経ただろうか、その枝の一本が不自然に動いた。よくよく見たらその動いたように見えた枝になんと翅が生えていた。しんそこ嬉しかった。数日後記録的な雪が降った。膝上まで積もった雪に埋もれながら森に分け入った私は、そこで氷を全身にまといつつ、先日と同じく凜として枝にしがみ続けるトンボの姿を目に焼き付けたのだった。<私に見破れぬ擬態はない・・・先生吠える・・・>

ハナカマキリ：東南アジアにいる、外見が蘭の花そっくりな姿をしている。図鑑の写真では、蘭の花に止まって獲物を待つ写真が多かった。実はこれらの写真はやらせなのだ。実際には、花も何もない緑の葉上に、無造作に居るらしいことがわかった。人間の目から見てある生物が何かに似せているように見えても、自然下で捕食者の天敵をちゃんと騙せているのか、証明するのは難しい。

ムラサキシヤチホコガ：枯葉に見える。「枯葉に擬態したガ」とみながいう。このガは、白壁にも、緑の中にも無頓着に止まる。生態も考慮せず安易に擬態と呼んではいけない。

この先生、娘と同じ年なのでまだ30歳代、昼も夜も元気に野山を駆け巡り、洞窟に潜り込み、虫を見つけ、嬉しそうに喜んでいる。奇人変人と自分でいうけれど、奇人変人だね、でもそれぐらいに自然が、生き物が、虫が好きなのはいいことだ。オレは山が好きだけれど、自然が好きだけれど、山の中、夜や雨の時は近づきたくない、という中途半端さだ。山の夜は真っ暗になる、崖も谷、樹も草も何も見えない、ランプをつけ熊よけ鈴を鳴らすと生き物が逃げてしまう。怖い、寒い、痒い、「おお かみさま～」である。

小松貴著<昆虫学者はやめられない-裏山の奇人、徘徊の記>

外来種の話：日本には北海道以外“シマリス”はいなかった。今、信州、岐阜、新潟などで、ペットとして飼われていたシマリスが野生化して繁殖している。連れてこられた外来種がそのままそこに居続け、そのせいで在来の生物が蹂躪され、絶滅していくのがよいなどという理屈は、決して通してはならない。これまで地球上の歴史のなかで起こった、様々な気候的、地理的、生物的な変化が重なり重なった結果、今そこにあるべくしてあるのだ。生態系を乱す原因を作ったのが人間ならば、その後始末をきっちりつけるのも、また人間のやるべきものである。外来種は駆除しなければいけない。「幼いころ家で長年シマリスを飼っていた私は・・・その可愛さ・・・」

ヤマネは日本固有種で天然記念物に指定されているが、行動圏や餌がシマリスと似通っており、身体が小さいゆえにシマリスと競合して負ける可能性が高い。間接的影響も心配、外国種の体内には、寄生虫や病原菌がいる可能性がある。日本の野山でそれらが蔓延したら、免疫のない日本の固有種に致命的な影響が及ぶかもしれない。

北八ヶ岳に“シラビソ小屋”がある。何度かテント場で寝たことがあるが、その小屋の窓外に小鳥とリスのお立ち台があり、いつも彼らを見ていた。そこにいたのはニホンリスだった。

2年前に白山に登った時に、腕章を巻いた人が草刈りをしていた。草の固有名詞は忘れたが、「外来種なので刈っています」ということだった。世界中のものが流れる時代、昔に比べてもどンドン出ていったり入ってきたりしていると思う。「国産固有種を守らないと 外来種は駆除しないと」という声はよく聞くが、「きりがないのでは・・・」とも思う。

アリ：アリは実のところ非常に強い生物だ。集団で組織だって統率の取れた行動をするという。強力なキバ、種によっては毒針、蟻酸などで武装している。アリは、ハチからわかれたものだそうだ。

植物で種子にアリの好む誘引物質を搭載し、アリの巣まで運んでもらうものがある。アリの巣のまわりには大量のアリの排泄物があり、その肥沃な土壌で植物が育つ。

強く恐ろしいアリに対して、弱小な生き物たちは、徹底して敵対するのも手だが、逆に懐に潜り込み、懐柔するというやり方もある。

賄賂：アブラムシは集団で植物に取り付き針状の口吻を茎に刺し、大量の液を吸い上げる。余った砂糖水を排泄し続ける。アブラムシに取り付かれた植物は弱る。アリにとってアブラムシの排泄物の砂糖水はまたとない御馳走だ。アリはアブラムシの群がる植物に集まる。アブラムシの天敵のテントウムシが来たら追い払う。こういう関係を“共生”と紹介される。

異なる種の世界で“共生”している状態が、「互いを 想い 愛し合い 仲良い」 などという関係ではない。共生関係にあるとしても、互いに相手のことも、生死も無関心だ。相手を利用しているだけだ。

教科書的には、共生（相利共生）というのは、「双方が 互いに 利益を 享受しつつ 関わりあうこと」とされ、逆に、「どちらか片方が 一方的に利益を搾取し もう片方には 利益がないか むしろ 害を被る関係」のことを片利共生とか寄生と呼ぶように書かれていたことが多い。

オレ達の親の世代までの先生方は確かにこういうふうに説いていた。人間もお互を思いやり、お互いに助け合い、争いをやめる、という論調で説いていた記憶がある。そして今、オレ達の子の世代の先生方は、「共生とはいっても 相手のことを考えているのではなく 自分のしていることがたまたま相手にとって都合がいいだけのこと」と言い放つ。全ての生物は、自身の生命を保つために生きている、自身の子孫を残すために生きている、生きているのだ。喰って寝て動いているのだ。こんなところに妙な道徳感や人生訓を持ってくるな、恥ずかしげもなくこんなことが言えたものだ。この歳になってやっと笑ってこう言える。

- ◎11:00 さあ出発です登ります。今日はテント泊をしようと滋賀県生杉にやってきた。メンバーは相澤・前川・三宅・岡村の四名。三宅車とは湖西道路真野 IC 付近で合流。梅の木から針畑川に沿って走った。この針畑川沿いの村々がぼつりぼつりと昔のままの人家があり、たまに人があり、たまに車もある。山がいい、樹々がいい、水がいい、走っていて気持ちがいい、お気に入りの村々だ。隣の木地村もそうだけど、この辺りの村々は、まだまだ昔の情緒を残している。
- ◎遠敷峠のてっぺんで一台駐車。もう一台に全員乗って三国峠方面へ。そこで一台を駐車、着替えをし、登山靴に履き替え、弁当水筒をもって、登り始めた。
- ◎小川沿いに進む。「せっかく作った 塩水を 車に忘れてきた ヒル いませんよう・・・」多少湿った場所を進み、「あれれ 迷ったかな 林業の印だったかな 登山道の印はないかな・・・」1,2分 で引き返し道に乗った。
- ◎小1時間で尾根道に乗った。三国峠にはブナの原生林、この辺りは広葉樹の雑木林、クリ、クヌギ、ナラ・・・知っている名前を並べてみたが、「いいかげんに 覚えろ」いまだに樹の名前は定かではない。
- ◎「夏場は 疲れる 夏バテだ」「昨日はよく寝た 今日元気」「何度か目が覚めた 足踏みをしていた」
- ◎江若尾根、“中央分水嶺高島トレイル”と書かれた黄色いテープが道案内をしてくれる。尾根は 500~1000メートルの低い山、だらりあがって、だらりさがって、そんなだらりがどンドン続く。黒い獣のうんこ、イノシシか熊か、おおお、甲虫がいる。昨日は午後の1時間ぐらいバケツをひっくり返したような大雨が降った。今日ぐらいから梅雨明けらしいが、多少曇ってきた。まさか昨日のような雨がここでも降れば、全身ずぶ濡れ、少々の雨具でも服の中まで濡れてしまうだろう。あんな雨が降って来れば、若い頃ならいざ知らず、老人連はテントを中止して帰らねばなるまい。尾根道といえども樹林帯、木洩れ日があるぐらいの道を進む、涼しい。
- ◎803 地点。ここで半分ぐらいかな。フルーツゼリーの凍ったものを持ってきたが、まだ半分凍っている。オレは氷に弱い、冷たすぎるものを口に入れると、頭がきゅんと来る。今も、もごもご食ってきゅんと来かかった。
- ◎この辺りはだらりぼこり、消えかかった沼がある、大きな木が生える、いつ来ても素晴らしい、お気に入りの場所だが、人の姿はまったくない、今日も我々以外は入っていないようだ。熊の痕跡があちらこちらに、チリンチリン大きく鳴らして進んだ。
- ◎ここで幕営しましょう。場所を決めてから、遠敷峠に止めていた車で、三国峠の車を取りに行った。それぞれ2台に積んでいた、テント、コンロ、ボンベ、コッヘル、食材・・・2.3度往復して運んだ。まずはテント、まずは一杯、豚鍋ができあがりポン酢でいただいた。8時ころになると真っ暗闇になってきた。4人で一升の焼酎が空になった。ミニギターで歌が出た、11時ころまでなんだかんだと話し込んだ。
- ◎翌朝、百里が岳まで行ってきます、と歩き出した。昨日同様、“江若尾根”の続き、だらだら上がったたり下がったり、よそ見でも危険はないというところもあれば、気をつけて歩かねばというところもある。体力は落ちているのは当然だけれど、平衡感覚が鈍く、“おっとっと”ということがよくある。危険個所で、“おっとっと”くだを巻いてしまうと事故になる、慎重に行こうぜ。「ここは下るねえ 鞍部はまだ見えないねえ」
- ◎遠敷峠のすぐそばに、ほんま物の“サバ街道”がある。小浜からこの根来坂を超え、針畑川沿いに京へ、サバを担いで若者が“えっちらおっちら”の街道だ。
- ◎最後に急坂を登りきると、だだっ広い地面、吹雪が吹くのか樹が少ない。は一は一ぜーぜーのあとの気持ちのよさ、水をごくごく、空はまっさお、ここも人がいない。トンボが多いね、トンボがあらわれると、真夏なの、それとも秋の気配かな。先ほど、アスファルトの道を歩いたが、「暑いね」そのてん樹々の中に入ると5度ぐらい下がるのではというぐらいに涼しい。昨日もよかったが、今日のこの歩きもいい、山はいい。
- ◎さあ帰ろうと昼飯の片づけをしていたら、ちょっと年下ぐらいのオヤジがガサゴソやっている。山の中、葉っぱや、幹や、枝を棒で叩いている。大きな白い布を張ったお盆で落ちてくるものを受けている。「なにもない」と捨てては、ガサゴソ、パンパン叩き、ポイと捨て、次の場所に。口にはチューブを咥え獲物がいれば吸い取るぞ体制、オオこれは虫やさんだね。昆虫の本を読んでいなければ、ケタイなやつと思うところだった。



◎衣川さんより：今までは、「その生物種が存続し繁栄するために、生物は行動しているのだ」と考えている学者が多かった。「利己的遺伝子」という本にこう書いていた。「生物は自己の遺伝子を存続させるためだけに行動している」という主張です。つまり種のことなど考えていない、自己の遺伝子を残したいだけという。

◎「利己的遺伝子」検索してみた：利己的遺伝子リチャード・ドーキンスによって提唱された概念。ダーウィニズムによれば、進化はより適応度の高い変異を持った個体が、他の個体との生存競争に勝ち、子孫にその変異を伝える、いわゆる自然選択によって起こるとされる。この自然選択の定義に従えば、より利己的な個体ほど生存しやすく子孫を残すチャンスが多いと考えられるが、実際には自分を犠牲にして他の個体を生存させようとする利他的行動が多くの動物にみられる。しかし、自分と共通の遺伝子の一部を持つ子孫を生存させることができれば、自分が犠牲になっても自分の遺伝子をより多く残すことができる。つまり、自然選択の結果生き残るのは、このような個体を犠牲にしても自分のコピーを残そうとする“利己的な遺伝子”であり、生物はそのために利用される道具にすぎない、と考えることで利他的行動も説明できる。＜ブルタニカ 難解である＞

◎異なる種の世界で“共生”状態が、「互いを 想い 愛し合い 仲良い」というふうに生物界を捉え、人生訓を、教訓を、垂れていた生物学者が過去にいた、何度も聞いた。アブラムシは砂糖水を出してアリに与える。アリは外敵のテントウムシからアブラムシを守る、「虫でさえこういうふうにお互いを想いあって協力しているのだ。我々人間はもっともっと他人を思いやり助け協力しなくては・・・」「先生はいいことを言うなあ」と小年時代のオレは感動していた。こういう考えは間違いだと今は思う。生物は自分のことだけを想えばいい。

◎オレ：今のオレは、鳥も昆虫もその他の生物も、それぞれの生命がある。生命を、永く元気に続けたい。喰って、子孫を残したい、繁栄したい、滅びたくない。それを邪魔するものから逃れたい、排除したい。ただそれだけが“生命”なのでは。

◎人間は、ホモサピエンスが生物界の頂点である。こういう考え方はしないほうがいい。

◎オレ：人間以外の生物が、「ホモサピエンスが生物界の頂点である」なんてことは思ってもいない、というよりも、なにも思っていない、意識していないのでは・・・。

◎進化：進化は単なる結果である。遺伝子のミスコピーが起こる。その偶然のミスコピーは生き残りにくいのが普通だけれど、偶然に環境が手伝って、次の世代に遺伝子が受け継がれ続ける、それが新種の生物だ。

◎キリンという種も、ミスコピーで首の長いものが出てきた、それが次の世代に受け継がれていった。草食動物は地面にある草を喰う。首の長いものが地面の草を喰うには不便だが、木々の葉なら喰いやすい。ミスコピーのキリンも、背の高い樹々の葉が豊富なので、次の世代に遺伝子が受け継がれ続けられた。

◎キリンの先祖は、首が長いことを、「しょうがない」と受け入れ、今いるところで頑張った。自分の親や仲間たちは、草や低木の葉を主食にしている。しょうがないので、高木の葉を食べた。

◎“用不要説”は間違いだ。よく使う器官は発達し、使わない期間は衰える、それが子孫に伝えられる。

◎クジャクの羽が美しい。モグラの目が退化していく。こういうのは自然選択といい、遺伝子の変化の進化です。

◎進化が起こりやすいのは、環境が変化した時。隕石衝突で恐竜が絶滅した時、哺乳類が爆発的進化をしている。

◎進化とは効率。ヒグマが北極に行き、たまたま白い熊が餌が採りやすいので進化した。茶色の熊にとっては退化。進化と退化は裏表、これが自然淘汰です。

◎ダーウインの言葉を誤解した演説。「この世に生き残る生物は 激しい変化にいち早く対応できるものだ」古生物学者は説く。「生物の絶滅の有無は 運で決まる」

アリの話を読みながら、「昆虫の変態 昆虫の社会性」ということに注目している。

「変態」先日来、昆虫の本を読むまではすっかり忘れていた言葉だった。夏に飛び回って生殖するのが親、産み付けられた卵が子、地中のイモムシが幼虫、仮死状態が蛹なのかな。不完全変態と完全変態があることを知った。

「完全変態の蛹の部分が無い」それを不完全変態というらしい。「昆虫は 飛び回れるようになったら すぐに死ぬ 可哀そうだ」という人がいたが、「土の中の イモムシ状態も いいものじゃないのかな」「仮死状態の 蛹も 時空を忘れて 宇宙旅行 これまたよし じゃないのかな」とオレはのたまう。

「社会性」群れをコロニーと呼び、女王を中心に子育て係、食料係、兵隊係といくつかの作業を分担して整然と村を纏めていく、これまたホモサピエンスが、下等動物の生態を自分たちの生き方、社会性になぞらえ呼ぶ言葉だそうだが・・・、そうおっしゃる通りに、そう行動している。

東正剛先生：昆虫は 4.8 億年前に現れ、3.5 億年前に完全変態昆虫があらわれた。不完全変態ではバッタ、ゴキブリ、カマキリ、ナナフシなど。卵から孵化してすぐに成虫に近い形をしており、活発に動き回る。

完全変態では、チョウ、カブトムシ、ハチ、ハエなど。幼虫はウジ虫型で移動力が乏しい。蛹になり、劇的な変態をとげ、ようやく活発な成虫になる。

オレ：生物が変態する理由がわからない。幼虫時代は大きくなるためにどんどん食べる。木の葉、野菜、おかまいなしにがつがつ食べる、食べられる側にとっては迷惑千万な話、というより枯れ滅びることもある。成虫になってからは飛び回り砂糖水を吸うだけ、吸われる花は受粉をしてくれるのでありがたいという想い。蛹の中はドロドロらしい。なぜ蛹になって、時間を過ごすのか、なぜそのような成長の仕方を選んだのか、「おっ そうなのか」という答えが聞こえてこない。

奇抜な話。例えばオレが、15 歳ぐらいで幼少時代を終え、一たび丸く固まり、胎内は一部を残してドロドロになって何年か眠った後に羽化ではないが生まれ変わる。どう生まれ変わりたいか、生まれ変わって何になり、何をやる、どう生きる・・・、これは少々想像する余地あり、ですね。

アリとハチの話：アリがハチ目であることは、女王とメスが 4 枚の膜状翅をもつことで明らかである。〈羽と翅の違い：羽は鳥と昆虫を含むが、翅は昆虫のもの〉

翅の喪失がアリにもたらした贈り物：飛翔による移動分散は、天敵からの逃避、配偶者や餌の探索、近親交配の回避、新しい生息地の開拓、様々な利益をもたらす。しかし、アリは翅を失い、長寿を手に入れた。有翅昆虫は、翅の損傷が寿命の大きな制限要因になっている。翅は再生不可能で、日に日にボロボロになっていく。

オレ：昆虫の翅は再生不可能なので、翅が傷つけばその昆虫の寿命もつきる。アリとハチの寿命の話も、種によって数字が様々なので、「わからない」ようだけど、翅のないアリのほうが長生きするのかな。

アリに噛まれると痛痒いのが長く続く、いやだねえ、ひつこいねえ。暖かい季節になると、アリがどんどん這いまわる。さあここで寝よう、テントを張ると、奴らがまいまいする。アウトドア好きのものにとって、虫に噛まれるのは仕方がないとはいえないやなものだ。

著者の先生方、地面をじっと見つめ、アリを観察する。オレは生物観察なんてしない、したくないね、しようとも思わない。アリヅカコオロギがたくさんいると言われても、見ないね、ごめんね。

夏が来た、「暑い あつい」この言葉しか出てこない。ちょうど一週間前に百里が岳に行っているが、その前日まで梅雨だったので、天気予報に晴れマークはなく、雲と傘のマークばかりだった。「いやだな 雨ばかりで」そんな舌の根が乾かぬうちに、「暑い あつい」のぼやき節、年がら年中ぼやいてばかりでよくないねえ。

安威川の河川敷、最近は去年の工事中のコースを走っている。底浚えの工事で河川敷が通行禁止だったので、中央市場の付近から摂津の方に走っていたが、工事が終わりいつもの河川敷へと走りしたが、工事のあとの水はけが悪い。上流からの砂が溜まり、そこに水がいつまでもしみ出ている。靴が汚れるのが嫌なもので乾いた工事中に使っていた道を走っている。ひとこと言っておかなければならないのは、最近のオレの走り、「それは ウォーキングだよ ジョギングじゃないよ」といわれる。先日もジジイから、「いつも よく 歩いて ますねえ」「はっ」最近はたまに、宙に浮きあがった走り方ができるようになった。

暑いので早い晩飯を食って、河原にやってくる。まだ明るい、走り出したすぐはまだまだ夕方の雰囲気、多少薄暗いかなという明るさが、10分経ち、また10分経ち、ちょっとずつ暗くなっていく。この一週間雨はまったく降っていない。快晴の日の夕暮れは、青い空がだんだん複雑な色に、よくいう茜色もある、ブルーにバイオレットが混ざりだし、揺れる草が黒くなっていく。ビルの窓がオレンジ色に光り、河原のコンクリートブロックが灰色に茶色を混ぜた色に変化していく。毎日見るこの、刻々と色に変わる地球の姿、これを楽しんでいる。

シラサギが群れで飛ぶ。昼間のシラサギは、ふらふら舞い上がり、すうーっと川の中に立ち、「ぎゃあ〜」と恐竜の雄たけび、べちゃりと白い水状のうんこを振りまく。魚獲りはへたくそだ、なかなかゲットできない。シラサギというけれど、本当はシラサギという名前ではないらしいが、個人的には、いまだにシラサギですませている。ものしりの方はお笑ください。＜日本ではいくつかの白いサギがいる＞そのシラサギが、10羽ほどの群れで川の流れの上を猛スピードで飛んでいく。シラサギも本気を出せばあんなに速く飛べるのか、と揶揄したくなるようなスピードでねぐらに向かっているのかな。この時間そんなシラサギグループをいくつか見る。オレンジ色の光が白い身体にあたる、羽を上げ下げする形がスローモーションを見るようにグイグイ動く。高速カメラで見たところ、翼は8の字を書くように上下しているらしいが、オレの目には白とオレンジ色と黒がぐるぐる回りながらえらく速いスピードで水の上を飛んでいく。シラサギの猛烈な一面を見るようで、これは嬉しい。

ア리가ね、ある場所、500メートルぐらいのところたくさん居る。河川敷を横切って右へ左へ歩き回っている。そんなアリの行進筋が100ぐらいあるかな。アリの踏み潰したくないもので、飛んで走っているが、あの場所はアリのテリトリーなのか、何かいいことがあるのか、そこだけアリの多い。社会性という以上、隣の群れと交わると闘いがおこるのか、話し合いが行われるのか・・・わざわざ一匹を隣の群れに連れて行って観察するほど興味がない、そんな暇はない、走らねば。

5.6日前に、1時間走っていつものベンチで水を飲み何気なく横を見ると、でっかい提灯状の月、「えええ えらくでかい月」まんまるなので満月と思われる。中に電球が入っているようなその月のありよう、小屋の横にあるそれは普段見る大きさの4倍くらい、小屋よりちょっと小さいぐらいに横たわっている。永らく生きているが今までで最高の大きさである。月が大きくなるわけがない、何らかの現象で大きく見えるだけだとは理屈でわかっているが、それでも目に見える美しさとしていいじゃないか、感激である。

この季節、昔は河原に出て走ると、シャツが絞れるぐらいの汗でびしょびしょになっていた。身体中の水が流れ、帰りの自転車も手元が濡れ、尻が濡れていた。昨今は乾いているねえ・・・。